

# ひまわりの メッセージ

108号

2020.7.13

NPOひまわりの花  
西濃圏域  
発達障がい支援センター  
発行人：中野たか子

小さな

小さな雨蛙



コロナ禍に加えて各地の大雨の被害のニュースが次々入って来ています。東日本大震災の折のテレビ映像の津波の速さにも息を呑みましたが、今回の大雨による川の水の速さと破壊の大きさに、自然の力というものを否応なく思い知らされます。被災された方々が、元の生活に戻られるには、大変なご苦労と長い年月がかかるであろうと思ひ、私にも何かできることはないのか…と心痛む日々でもあります。

雨の中、土曜日には依頼を受けて池田町に出かけ、年長児の数名の検査をして来ました。今は検査をするにも以前に増して気を使います。お互いにマスクをしていますから、子ども達の心の動きをとらえるのにも神経を使います。でも子ども達の方が私にか

をくれているように感じます。子どもってすごいなあ…と、いつもエネルギーをもらって帰る私です。子ども達のエネルギーに加え、今回は、職員の方の手作りのシフォンケーキまでいただいたので、近くに住む娘にも半分おすそ分けしようかと家を訪ねました。コロナのこともあって、久しぶりの訪問です。

行ってみると、我が家におとらず草が伸びています。玄関先のとメジオンなど数本を抜き取っていると、何と、小さな小さな雨蛙が塀にくっついていてはみません。見ると、ここに、ここに…と四、五匹がすぐに見つかりました。まだ生まれたばかりなので、とてもきれいな黄緑色の雨蛙はニセインチ程でしょうか。それでも私が伸ばした手さのがれて跳んで逃げるのです。小さな手も、その姿も余りにもかわいくて、しばらく見入ってしまいました。

大雨の被害に苦しんでおられる方々に申し訳ないと思いつつ生まれたばかりの小さな蛙に何か心安らぐ思いがしました。自然の中で、こうして生まれ出る小さな生命があることに喜びを感じ、閉塞した今の生活様式に、多少疲れてきているからなのでしょうか。でも、希望に満ちた未来像を思い描くのが難しい今だからこそ、身近な生活の中で大切なものを再発見できるかもしれません。

今は、被災地の一日でも早い復興とコロナの感染拡大防止を心に祈りつつ、一日一日を大切に過ごしたいものです。

少しずつ戻りつつある

日常の中で

子どもたちの幸せを願って

六月から学校や園が再開し、少しずつ日常を取り戻しつつあるようですが、マスクの着用や「三密」を極力避けるなど先生方のご苦労も大変だろうと思います。私の出番もふえて来て、巡回訪問や検査依頼もふえてきました。そんな中で、気になること、もう少し家庭でも努力してみたらと思うこと等々を書いてみようと思います。「またか……」と思われることもあるでしょうが、性懲りもなく書くことにします。

## 「普通の子に」



幼児期の子をもつお母さんのことは、ことばが他の児より遅かったり、できないことがあったりすると、親として、そう思ってしまうので、お母さんができないことに対して「何度言っただい分かるの〜」と叱責を繰り返されることもあるかもしれません。

でも、ちょっと待って下さい。もう一度子どもの発達を見直してみよう。言葉は教えられ強要されて増えてくるものではありません。

せん。お母さんとお子さんの共感の関係の中で育つものです。そして三歳の発達に至ると、とたんに自己主張がはげしくなってきました。そんな時に、何でもお子さんの要求通りになっていると、おそろくその後の子育てはもっと大変になってくるでしょう。自己主張しても受け容れてもらうことと、受け容れられないことがあるのだと学ぶことは、とても大切なことだと私は思っています。「お子さんの気持ちはわかるし、共感する、けれど、聞けないことなのだ」という親としての覚悟があるかどうか、が重要ですね。しかも、それは、やみくもに親として子を服従させることではないのです。

「普通の子」というのは、一体どんな子が分かりませんが、例え障がいがあっても、日常生活の中で生きる力を育んでいくことが家庭の役割でしょう。

生活リズムを整え、家庭のルールとしてゲームやタブレットの使用などについて、幼少期から子どもの好き勝手にさせないことに気を配るべきだと思えます。そして、親の方も子どもの手本となるように、言ったことは守る大人でいたいものです。

## 体づくりの大切さ

子どもたちに体操座りをさせるのは、いつ頃からでしょうか。私たちが子どもの体の発達を見る時、開口といって、たえず口

を開けていないか、座るとき、割り座（お姉さん座り）をしていないか、体操座りできるか、歩き方や走り方はどうかというような点に注目します。つまり、体のバランスです。

体操座りができないお子さんは、体を支えるために手を使わなければなりませんから、左右の手を協調させて動かすことはできません。当然利き手と添え手という手の役割が不十分です。両手を使わなければならぬ食事や書字も上手くできないのは当たり前です。ですから、まずは体づくりです。

体づくりが大切だといってもスポーツ選手をめぐらしているのではなく、それは座る時に手で体のバランスを取る必要がなくなれば、その程度で良いと私は考えています。多動な子に対して、よリハイテンションな動きをさせていく必要はありませんし、体の中心部分が育って両手の自由が獲得されれば、目と右手左手がうまく協調して動かせることを次に考えたいからです。お子さんが添え手などの様に使っているのか、いえ、使うことができていないのかを観察してみてもいいのです。もちろん、園や学校でも知っておいてほしいと思います。

就学が迫ると、ご家庭では文字を教えようとされますが、形のちがいを見分ける力が育っているかどうか、はさみで線が切り進めるかどうか、鉛筆の持ち方はどうかといった点を確認されているでしょうか。五歳児は、鏡文字といって「と」と「う」と書いたリ「つ」と「こ」と書いたリしますが、そんなことは発達

上の当然のことなので問題はありません。それよりも手指や目の協調動作に注目して下さい。お箸や鉛筆の正しい持ち方を学ばせて下さい。就学する前に、園でも気を付けてあげたものです。学習の基礎づくりは、園の遊びの中で培われていきますが、子どもたちの発達に以前と比べてゆるやかになっていることを思えば、より細かな配慮が必要になってきているのではないのでしょうか。

## 学校の中で……

長期休校後の学校は、以前と比べて静かだなあと感じます。子どもたちもコロナウイルスに対して、我慢していることも多いかもしれませんが、学習面での困りが潜在化していかないと心配でもあります。

「書くことが苦手です」、「読むのが苦手です」、「好きなことしかやりません」等々何度も耳にしたり、文章として目にすることは、では、その原因は何なのでしょう。子どもたちの困りに対して、何故なんだろうと考え、その原因・要因を探る少しでも解決に向けていくことが、私たちに求められていることだと思います。

書くことが苦手な子は、視機能の問題だろうか、空間認知の問題だろうか、手の不器用さだろうか、形態認知の弱さだ



ろうか、それとも読むことの苦手さが根底にあるのではないかと等々と考えてみることで、何とか次の手だても見つけたのです。

子どもたちは、どの子も完璧にやりたいし、ほめられたい、注目されたいと思っているのではないのでしょうか。でも、他児と比べて出来ない自分に苛立ち、ある子はあきらめ、ある子は逃げ出そうとしてしまいます。子どもたちの複雑な思いを受け止め、一緒に考え、乗り越えさせていけるのも教育のプロである先生方でしょう。自分のことを信じて支え、励まし、見守ってくれている大人がいることで救われる子がたくさんいると思います。

## 将来に向けて 進路

そろそろ来年度に向けて子どもたちの進路についての相談などが始まっています。その中で「不登校だから特別支援学校に」とか、知的な発達もゆっくりなのに「自閉症だから自閉情緒学級に」といった声があると聞きます。

「特別支援教育は、特殊教育ではないし、支援学校や支援学級に在籍している子たちのための教育を指しているのではない」と再三言われているにもかかわらず、まちがったとらえ方をしていますか、と質問したくなることもあります。そして通常学級で手がかかるから(迷惑だから)支援学級へ行ってほしいということがあったりするらしいのです。本当ではうか、今まで私

は障がいがあるかと無かうと子どもたち一人ひとりが幸せになってほしいと願ってきました。時には保護者の方と意見の衝突をみたこともありましたが、どこに進んでも、どの道にもメリットとデメリットはあると思います。私たちは親権者ではありませんから、最終的な判断は保護者の手にゆだねられます。その子が進んでいく先に理解者ばかりがいるとは限りませんし、逆にすばらしい出会いがあるかもしれないのです。ただ、お母さん方に言いたいのは、自分の見栄や社会的な体裁、いわゆる世間体には左右されたいは、自分の見栄や社会的な体は親の所有物ではありません。二両親が亡くなった後も一人で生き抜いていかなければならないのです。そのためには、どんな学びが必要なのでしょう。将来生きていく力をつけていくためには、どこで学ぶのがより良い選択なのでしょう。例え障がいがあっても通常学級で学んだ方が良かったらという場合もあると思います。どうか悩んで悩んで方向性を見つけて出してほしいと思います。

お知らせ

親の会の例会は九月十四日、十月十二日、

いずれもスイトピアセンター五階

創作実習室③になります。

※八月はお休みです。

